

五塚山古墳

2001

静岡県小笠郡大東町教育委員会

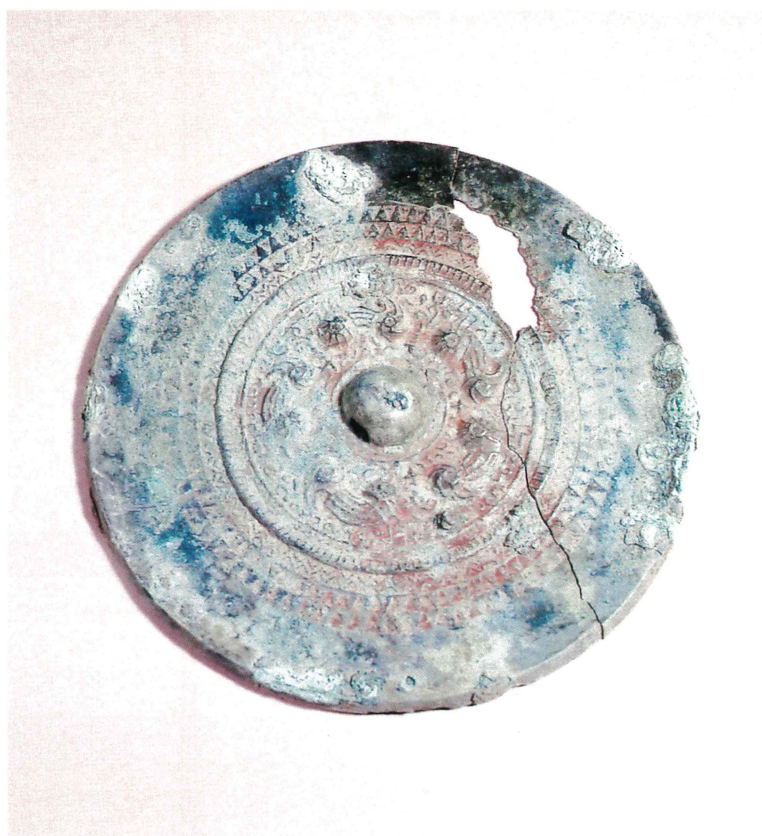
いつ づか やま こ ふん
五 塚 山 古 墳

2001

静岡県小笠郡大東町教育委員会



五塚山古墳 遠景 空中写真



第一主体部出土青銅鏡



第一主体部出土金具



有蓋台付四連坏



台付三連碗

序

静岡県小笠郡大東町には、様々な遺跡が確認されています。その中でも特に「国指定史跡 高天神城跡」をはじめとする中世の各種遺跡と、菊川流域に多く分布する古墳時代の横穴群が大半を占めています。

こうした分布状況の中、古墳時代の首長墓的な古墳は今まで確認されていませんでしたが、この度の発掘調査で「五塚山古墳」が調査され、県内でもあまり類例を見ない「礫槨」構造を持つ埋葬施設や、「有蓋台付四連坏」など県内では出土例のない遺物の発見があり、当地域の有力者が埋葬された古墳であることが判り、様々な歴史的解明がなされました。

この発掘調査で明らかになった遺構や遺物は、大東町の貴重な文化的遺産であり、後世に永く伝えていかなければなりません。そうすることにより、大東町の古代が解明されるのと同時に、その資料を生かした生涯学習の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の発掘調査から報告書作成にいたるまで、多くの方々のご理解とご協力をいただきました。感謝の意を記して、序文とさせていただきます。

平成13年3月吉日

静岡県小笠郡大東町教育委員会

教育長 三 輪 隆

例 言

1. 本書は「平成9年1月13日付け、大教社第264号」及び「平成9年8月19日付け、大教社第196号」並びに「平成10年5月26日付け、大教社第85号」による発掘調査の通知に基づく五塚山古墳（いつづかやまこふん）の発掘調査報告書である。なお、平成10年度に概報を刊行しているが、本書をもって正式報告とする。
2. 「五塚山古墳」は静岡県小笠郡大東町大坂7163-3に所在する。
3. 本発掘調査は、第1次調査を平成9年1月16日から3月31日まで、第2次調査を平成9年8月4日から10月24日まで、第3次調査を平成10年5月26日から8月10日まで、それぞれ実施した。
4. 現地での発掘調査は、静岡県教育委員会文化課の指導を得て大東町教育委員会社会教育課が実施した。
5. 本書の編集事務についても、大東町教育委員会 社会教育課が実施した。
6. 現地発掘調査及び本書の作成編集は、社会教育課 鬼澤勝人が担当した。
平成10年度調査及び本書作成においては夏目不比等が補助した。
7. 現地調査費及び本書の作成印刷費の全額を大東町が負担した。
8. 現地調査から報告書作成に至るまで、以下の方々からご教示を賜った。（敬称略・順不同）
大塚初重・平野吾郎・五島康司・山口和夫・中嶋郁夫・鈴木敏則・後藤健一
澁谷昌彦・篠原修二・川江秀孝・松井一明・白澤崇・前田庄一
9. 調査によって得られた資料はすべて大東町教育委員会が保管している。
10. 出土金属製品の保存処理は株式会社東都文化財研究所に委託した。
11. 出土木製品の保存処理については株式会社吉田生物研究所の多大なる協力を得た。
12. 発掘調査作業員（五十音順）
相澤猪一郎・相澤ふみえ・相澤美枝子・伊藤きぬ・伊藤静江・植田桂一・大石正枝
大石光枝・川口由郎・杉本二三江・鈴木喜代士・鈴木隆・富田かずえ・富田直子
前島隆・森下昭・八木厚子・八木桂子

目 次

I. はじめに	1
II. 確認調査	2
III. 調査に至る経緯と調査経過	3
IV. 周辺の立地と歴史的環境	6
V. 遺構について	8
1 墳丘について	8
2 第一主体部について	11
3 第二主体部について	11
4 第三主体部について	15
VI. 出土遺物について	17
1 出土土器について	17
2 金属製品について	19
3 玉類について	23
4 木製品について	25
VII. まとめ	26

挿 図 目 次

第1図	五塚山古墳 位置及び周辺遺跡分布図	7
第2図	五塚山古墳 墳丘測量図・トレンチ配置図	9
第3図	墳丘トレンチ土層断面図	10
第4図	第一主体部（礫槨）検出状態図	12
第5図	第一主体部（礫槨）最終状態図	13
第6図	第一主体部（礫槨）遺物出土状態図	14
第7図	礫槨 模式図	14
第8図	第二主体部 遺構図	15
第9図	第二主体部 遺物出土状態図	15
第10図	第三主体部 遺構図	16
第11図	第三主体部 遺物出土状態図	16
第12図	礫槨 出土土器 実測図	18
第13図	礫槨 出土金属製品 実測図	20
第14図	第二・三主体部 出土金属製品 実測図	22
第15図	礫槨 出土玉類 実測図	24
第16図	礫槨 出土木製品 実測図	25

図 版 目 次

巻頭空撮カラー

- 図版 1 - 1 五塚山古墳 空中写真 (斜め)
- 2 五塚山古墳 空中写真 (真上)
- 3 五塚山古墳 遠景 (西から)
- 図版 2 - 1 第一主体部 遺構確認状態
- 2 礫槨 検出状態
- 3 礫槨 棺埋納痕状態
- 4 礫槨 最終状態
- 図版 3 - 1 須恵器 出土状態
- 2 須恵器 出土状態
- 3 青銅鏡 出土状態
- 4 木製品 出土状態
- 5 鉄剣 出土状態
- 6 鉄矛 出土状態
- 図版 4 - 1 第二主体部 検出状態
- 2 第二主体部 礫床状態
- 3 第二主体部 直刀出土状態
- 4 第三主体部 遺構確認状態
- 5 第三主体部 完掘
- 6 第三主体部 遺物出土状態
- 図版 5 - 1 礫槨 出土 有蓋台付四連坏
- 2 礫槨 出土 台付三連礎
- 3 礫槨 出土 青銅鏡
- 4 礫槨 出土 鉄剣
- 5 礫槨 出土 鉄矛
- 6 礫槨 出土 刀子
- 7 第二主体部 出土 直刀
- 8 第三主体部 出土 直刀
- 図版 6 - 1 第三主体部 出土 鉄鏃
- 2 第三主体部 出土 鉄鏃
- 3 礫槨 出土 木製品
- 4 礫槨 出土 管玉・丸玉
- 5 礫槨 出土 小玉
- 図版 7 - 1 有蓋台付四連坏 破片
- 2 台付三連礎 破片
- 3 四連坏 接合 (底部)
- 4 三連礎 接合
- 5 四連坏 接合 (横)
- 6 礎 (接合面)

I. はじめに

静岡県小笠郡大東町は、日本の大動脈 東海道の南方に位置する気候温暖な地域である。また、遠州灘に面しており冬は西からの季節風が強いが、年間雨量も少ないため日照時間が長く農作物に適したところで、稲作やお茶のほか、イチゴ・メロン・トマトなどが特産となっている。しかし、農業収入も減少しつつある中で、生活形態の変化や農業従事者の後継者不足などにより、農業経営の重大な課題となっている。

また近年では、東海道新幹線、東名高速道路までのアクセス整備も進み、民間企業の積極的誘致から大工場が軒を連ねるまでに至り、人口も徐々にではあるが増加してきている。そして、代々大東町に暮らしている町民と他地域からの町民の交流も深まりお互いに刺激し合い、より新鮮な情報を取り入れた中で町民ニーズも変化してきている。さらに、生涯学習が叫ばれ、町民の余暇時間が増大し、趣味・文化への意識が高揚してきており、町民から文化的ホールの早期建設について強い要望が出ていた。

こうした中、ふるさと創生事業として「ふるさと村公園構想」という計画が持ち上がった。これは、下小笠川改修事業計画との関連から、現下小笠川廃川後の跡地利用の一つとして、その周辺地域を含めた30haに文化会館・図書館・資料館・美術館・工芸館などの文教施設のほか、野鳥の森や親水公園などとそれに続く散策道を設置し、町民の集う憩いの場とする壮大な構想である。そこで、「ふるさと村公園」構想の検討段階に入り、まず始めに文化会館建設が各施設の建設に先立って計画された。この計画では、丘陵西側の丘陵裾部に文化会館を建設し、その裏山にあたる丘陵部分の尾根を遊歩道として整備し山林内を散策できるようにし、最高海拔地点に展望施設を建設するというものであった。

この文化会館建設に関わる造成計画地域内には、静岡県文化財地名表Ⅱ及び同文化財地図Ⅱによると、「釜田砦跡」が周知の埋蔵文化財包蔵地として確認されていた。また、丘陵上の散策道計画地や展望台施設建設計画地内には未確認の埋蔵文化財包蔵地の存在が予想されたため、町関係部局と協議し大東町教育委員会が事業主体となり平成6年度に確認調査を実施することとなった。

Ⅱ. 確認調査

「ふるさと村公園」構想のうち、文化会館建設事業計画は各施設に先立ち建設するもので、会館の建設予定地点には遺跡が確認されていなかった。また、構想推進のために町有地として確保した周辺地域については当面緑地として残るが、その丘陵部において「釜田砦跡」の一部が周知範囲内となっていた。しかし、「釜田砦跡」については、以前の調査でも遺構が確認されず遺跡範囲が縮小されている経緯もあり、今回の事業においても詳細な確認調査が必要とされていた。そこで、町関係部局と協議を実施した結果、その事業計画地域内の確認調査を実施する事となった。

この遺跡所在有無の確認を目的とした調査は平成7年3月17日から、遺跡が存在する可能性が予想されるすべての地点にトレンチを設定して実施した。トレンチの数は総計で11ヵ所にのぼった。また、当該計画地域の北側の東向き斜面には「本勝寺裏横穴群」が確認されており、横穴の存在も想定されたため、丘陵の東西両斜面を踏査しその存在の有無を確認した。調査では、終盤に差し掛かった時点でも全く遺跡の存在を窺わせる痕跡がなかった。そして、古墳の様相を示すと考えられた丘陵上の最も標高の高いところに設定した最終のトレンチでは、薄い表土の直下からこぶし大ほどの川原石が多量に検出した。しかし、この礫層は特に積み上げた痕跡も規則的に並べられた様子もなく乱雑に堆積していたため、発掘当初は小笠山礫岩層ではないかと考えて調査を続けていた。その後、地表面から約20cm～30cmくらいの深さからその川原石に混ざって須恵器片が出土した。この須恵器片が出土した事により、さらに慎重に調査を続けたところ、礫層は全体に見られるもののトレンチ内全てに分布するものではないことが判明し、調査途中の礫層検出状況が古墳主体部の一部と考えられる状況となった。さらに周辺の下草を伐採し地形の状況を把握した結果、古墳であるとの結論に達した。

尚、発見されたのはこの古墳1基のみで、横穴その他の遺跡は確認されず、また「釜田砦跡」についても遺跡は残存しておらず、遺跡範囲が縮小されることになり、平成7年3月29日で調査を終了した。

Ⅲ. 調査に至る経緯と調査経過

確認調査で新たに発見された当古墳は周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されていないため、当初は（仮称）「ふるさと村公園内古墳」と呼称していた。文化財保護法に基づく周知の埋蔵文化財包蔵地として、新規に登録する必要からこの古墳の名称が必要となった。当該地点は、大東町大坂地内に属するが尾根筋上にあり、その反対側は大東町川久保地内となる。厳密な地番で言えば古墳の半分は川久保地内に属し、遺跡名を地名から呼ぶことは混乱を生じる可能性があった。そこで旧村の状況を調査すると、やはり同様に尾根が村の境となっていた。

当地域は江戸時代に国学の発達した地域で周辺からは多くの国学者を輩出しており、中でも旧浜野村出身の八木美穂は横須賀藩主 西尾隠岐守の藩校に招かれ歌道、和漢の書を講じた人で、その著書の1つに『郷里雑記』がある。これは当該地域周辺の村々の様子などについて書き記したもので、その中の「川久保村」の条に“五塚山”について記載されている。[五塚山。村の南 新川の境にあり。兼政の池の正面に川及び道を隔てあり。丘上に小さき塚 五ッ並びたり 伝説無し。]（以上抜粋）

この記載事項と現在の地形が合致していることから、当該古墳を含めた周辺が“五塚山”と呼ばれていたこと、また地域の古老は今でも当地域を五塚山（いつづかやま）と呼称していることから、この古墳の名称を『五塚山古墳』と命名した。

しかし、『郷里雑記』では他にも塚が四つ存在したことが記されているが、今回の調査では他の四つの塚については全く確認できなかった。また、『郷里雑記』記載の塚が直ちに古墳時代の古墳を指しているものなのか、或いは他の時代の墳墓を指しているものなのかは不明であるが、現段階で周辺においてそれらを示す痕跡が全くないことから、『五塚山古墳』の名称を採用した。

五塚山古墳が存在する西側丘陵下では文化会館の建設が進められており、当該地点においては展望台施設の建設が、尾根筋道は遊歩道として整備される計画が持ち上がっていた。再三にわたる関係部局との協議の結果、工事により遺跡が消滅してしまう部分において、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

調査は、第一次調査を平成8年度に、第二次調査を平成9年度に、第三次調査を平成10年度に、それぞれ実施した。

第一次調査では、調査前は、多量の礫の検出から小笠山礫岩層か或いは古墳の葺石ではないかと考えた。また、確認調査時では墳丘の形状を概観したのみで径も小さいことから、当初は古墳時代後期の群集墳であるとの誤認からの着手であった。確認時のトレンチを把握するため、墳頂部の精査から始めた。調査が進んでいくと、大量の礫が続けて検出し、しかもその範囲が全面ではなく限られた範囲でしか検出しないことから、その周辺の精査を進めていくと古墳の主体部であることが判明した。そして、礫の状況把握に努めたところ、この古墳が「礫槨」構造を持つ古墳であることが判明した。また、この主体部に並行して、さらに別の埋葬施設が発見された。この埋葬施設は礫が敷かれてはいないものの覆われていることはなく、第二主体部と呼称して調査を進めた。

こうして、礫に覆われた特殊な主体部であり慎重に調査を進めたことと、多量の礫の実測に手間取り、調査が終了せず年度末を迎えた。さらに、当初、須恵器は坏の蓋と身と思われたが、調査が進むと、身の底の状況が底部に至らず、子持ち付きの壺か器台のような形状であることが判明した。

第二次調査では、体制を立て直して平成9年8月4日から調査を再開した。今回の調査では「礫槨」構造の解明とその築造過程を明らかにすることを主な目的とした。

第一主体部では、礫を実測しながら取り上げていくと、棺が礫で覆われている状況が確認でき、床面に近づくと先の須恵器と同一固体の土器片が出土し、さらに鉄剣、鉄矛、青銅鏡、木製品、玉類が次々と出土した。出土須恵器は有蓋台付四連坏と台付三連礎の2種類であることが判明した。第二主体部では、鉄製直刀のみが出土した。

調査が進展していく過程で、調査担当者が入院加療に陥り、またしても調査を中断せざるを得なくなった。

第三次調査では、再度体制を強化して平成10年5月26日から再開した。今回の調査でも「礫槨」構造の解明と、さらに墳丘の規模及び形状を把握することを目的とした。墳丘についてはトレンチを入れ、「礫槨」の解明についても調査を進めていくと、この第一主体部に切り合っただけでさらに別の埋葬施設が発見された。これを第三主体部と呼称して調査したが、第一主体部の前に築造された埋葬施設であることが判明した。第三主体部からは、鉄製直刀と鉄鏃が出土している。

こうして、二度にわたる中断を経ての調査であったが、特殊な遺構と遺物を持つ古墳であることが明らかとなり、再度関係部局と協議して古墳の保存を訴え、展望台の建設を白紙にし、計画を取り止めてもらうよう要請した。

調査経過の概略は以下のとおりである。

○第一次調査

・平成9年1月16日から同年3月31日まで

1月31日 第一主体部の規模が明らかになりつつある。

3月6日 礫槨構造の埋葬施設と判断される。

3月10日 第二主体部検出。

3月31日 一旦調査を終了する。

○第二次調査

・平成9年8月4日から同年10月24日まで

8月14日 青銅鏡出土。

8月15日 鉄剣出土

8月28日 須恵器片が多量に出土。有蓋台付四連坏と共に台付三連甗が出土。

9月12日 鉄矛が出土。

10月16日 礫槨の構造が明らかになりつつある。

10月24日 中断。調査を一旦終了する。

○第三次調査

・平成10年5月26日から同年8月10日まで

5月26日 再開し精査する。トレンチを設定し、墳丘の調査も並行して実施する。

7月7日 第三主体部検出

8月10日 すべての調査を終了し、機材を撤去する。

IV. 周辺の立地と歴史的環境

五塚山古墳が所在する小笠郡大東町大坂7163-3番地は、小笠山丘陵が八手の葉状に南へ伸びた先端部に近い台地上に位置している。さらに南東方向に台地が延びるが、下小笠川で台地が分断しており、大東町中地区所在の中村砦跡付近で完結しており、その先からは低湿地帯に至る。

町内には、約140ヶ所の遺跡が確認されているが、縄文・弥生時代の遺跡はわずか8遺跡で調査例も少なく、それらの時代については不明な部分が多い。

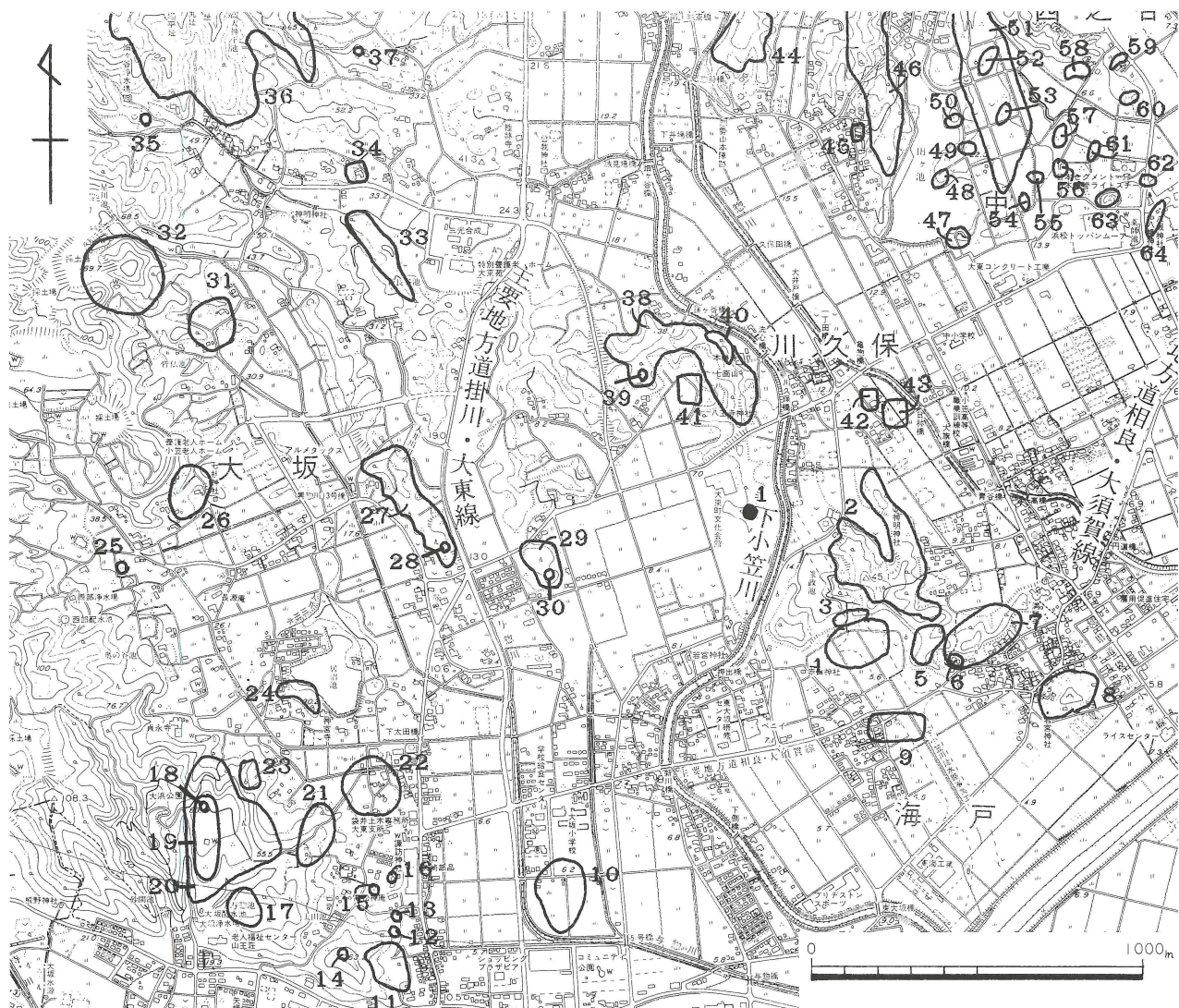
町内で確認された遺跡の約半数を占めるのが古墳時代の遺跡である。その内、大半が横穴群で43群240基が確認され、調査例が7例あり、横穴の様子が明らかになってきている。横穴群の分布状況は一級河川 菊川の支流である佐束川、下小笠川によって開析され複雑に入り組んで小支谷を形成している丘陵の、南向きや東向き斜面に分布しており、これは遠江に数多く分布している横穴群のうち、所謂「菊川流域の横穴群」である。このように横穴群は町内全域に広く分布しているのではなく、横穴群が濃密に分布する地域は下小笠川の左岸までに限定され、右岸側においてはわずかに1群3基（No. 40 本勝寺裏横穴群）のみである。（第1図）

これに対して、高塚式の古墳の調査例は少なく詳細は不明だが、「五塚山古墳」を含めて17基が確認されており、6世紀代の古墳時代後期と思われる古墳については15基あり、横穴群の地域と重複して分布している古墳が6基、それ以外の9基はすべて下小笠川より西側に存在する。

今後の調査が増えていけば古墳時代の様相が、横穴群も含めた全体の中で明らかになっていくと思われる。

また、町内で古墳時代の遺跡と並び多いのが、中世の遺跡である。これらは、国史跡高天神城跡の攻防に伴う砦や館跡で、町全体に分布している。

今後、その他の時代の遺跡も調査されていくことにより、連綿と続く大東町の歴史が明らかとなっていくことと思われる。



1	五塚山古墳	2	帝釈山砦	3	兼情横穴群	4	兼情遺跡
5	高塚横穴群	6	斎藤宗林屋敷	7	雑賀砦	8	中村（城山）砦
9	代官屋敷	10	報地遺跡	11	大石屋敷	12	三井山IV号墳
13	三井山Ⅲ号墓	14	惣兵衛山古墳	15	鷺田古墳	16	太田古墳
17	三井山Ⅱ遺跡	18	三井山Ⅰ号墳	19	三井山Ⅰ遺跡	20	三井山砦
21	三井山Ⅲ遺跡	22	神田遺跡	23	三井山Ⅱ号墳	24	神宮寺砦
25	奥の谷古墳	26	七社神社遺跡	27	中川原砦	28	沖ノ前山Ⅰ号墳
29	山王遺跡	30	山王山古墳	31	星川窯	32	星川砦
33	畑ヶ谷砦	34	小笠原右京屋敷	35	畑ヶ谷古墳	36	高天神城跡
37	谷田古墳	38	釜田砦	39	釜田古墳	40	本勝寺裏横穴群
41	岡部丹波屋敷	42	宝屋敷	43	高天神兼明屋敷	44	惣勢山砦
45	池田縫平屋敷	46	田ヶ谷砦	47	毛森山借込横穴群	48	毛森山大恒B横穴群
49	毛森山大恒A横穴群	50	毛森山勝田ノ谷横穴群	51	西ノ谷砦	52	毛森山一の谷A横穴群
53	毛森山一の谷B横穴群	54	毛森山欠下峠C横穴群	55	毛森山欠下峠B横穴群	56	毛森山欠下峠A横穴群
57	毛森山一の谷C横穴群	58	毛森山一の谷F横穴群	59	毛森山一の谷H横穴群	60	毛森山一の谷G横穴群
61	毛森山一の谷D横穴群	62	毛森山一の谷E横穴群	63	毛森山薬師横穴群	64	毛森山一の谷I横穴群

第1図 五塚山古墳 位置及び周辺遺跡分布図

V. 遺構について

1 墳丘について (第2・3図)

古墳の墳丘の形状を確認するため、トレンチを五ヶ所設定して調査した。墳丘のある丘陵は、南側に平場が存在し、さらに北西側にも丘陵が延びており、地表面の観察からは、前方後円墳となる可能性があった。また、頂上部は方形状を呈しており、方墳の可能性も考えられた。

各トレンチは基本的に幅1mで設定し、土層を確認しつつ地山まで掘り下げた。No.1トレンチは、墳丘北側に長さ8.5m、No.2トレンチは墳丘北西に長さ5m、No.3トレンチは墳丘西側に長さ4.5m、No.4トレンチは墳丘南側に長さ10.3mで設定した。

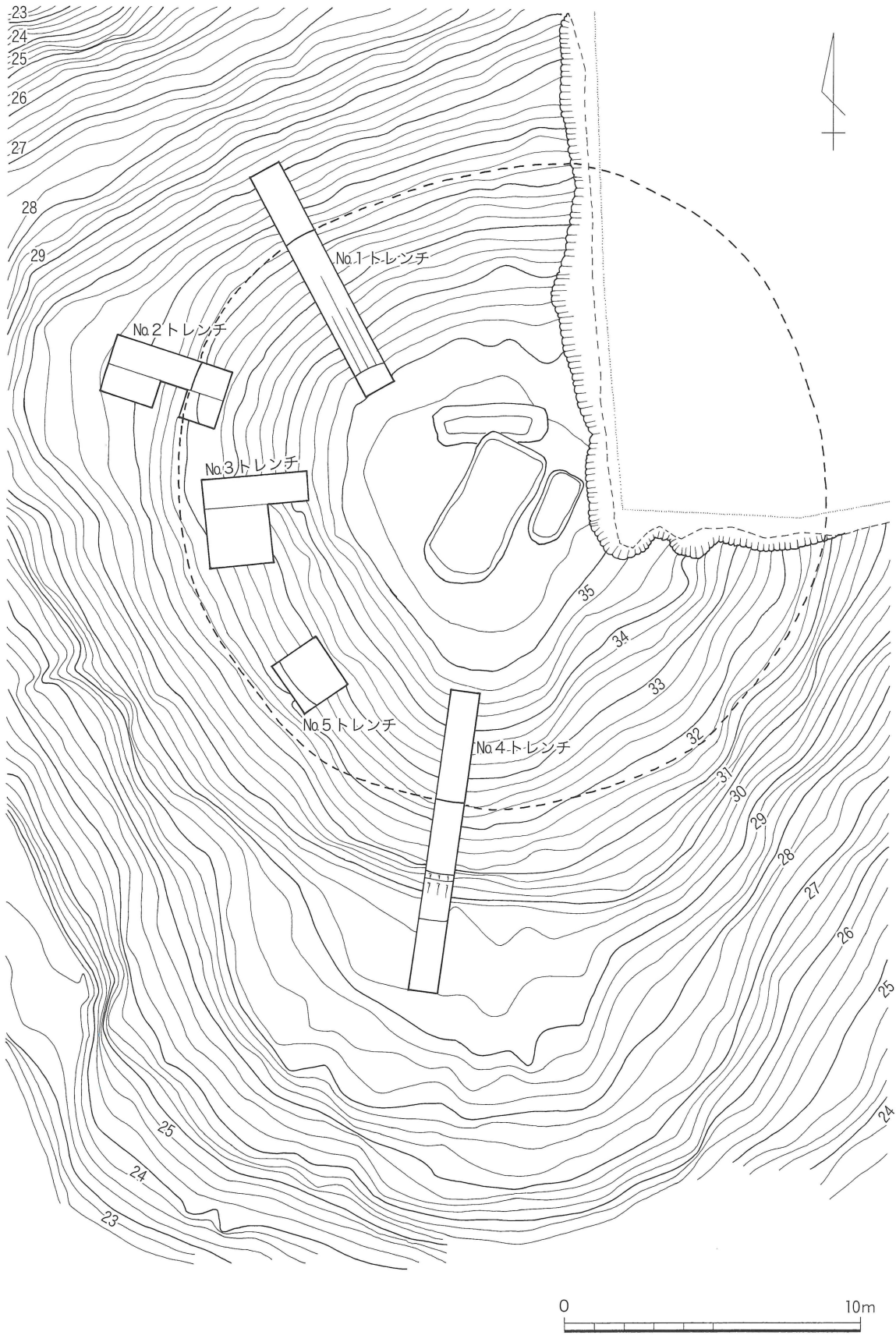
墳丘頂部近くから長く設定したNo.1及びNo.4トレンチにおいて、地山の上に何回かに分けて土を盛った様子が確認できた。土は固くしまっており、土を盛り固めていたと思われる。墳丘自体は自然の尾根の地形を利用し、元々の丘陵に削土、盛土等の手を加えて築かれている。

No.1、2、4トレンチにおいて地山をわずかに削りこんだ墳丘の裾と思われる部分が検出された。トレンチ内からの検出であったため、さらに平面的に確認するため、No.2トレンチ南に長さ2m、幅1mと長さ1.8m、幅1mの2箇所拡張した。No.3トレンチにおいても南に長さ1.8m、幅2m拡張した。また、墳丘南西に幅2m、長さ2mのNo.5トレンチを設定した。No.2トレンチ拡張部、No.5トレンチにおいて、墳丘の輪郭と思われるラインが検出された。

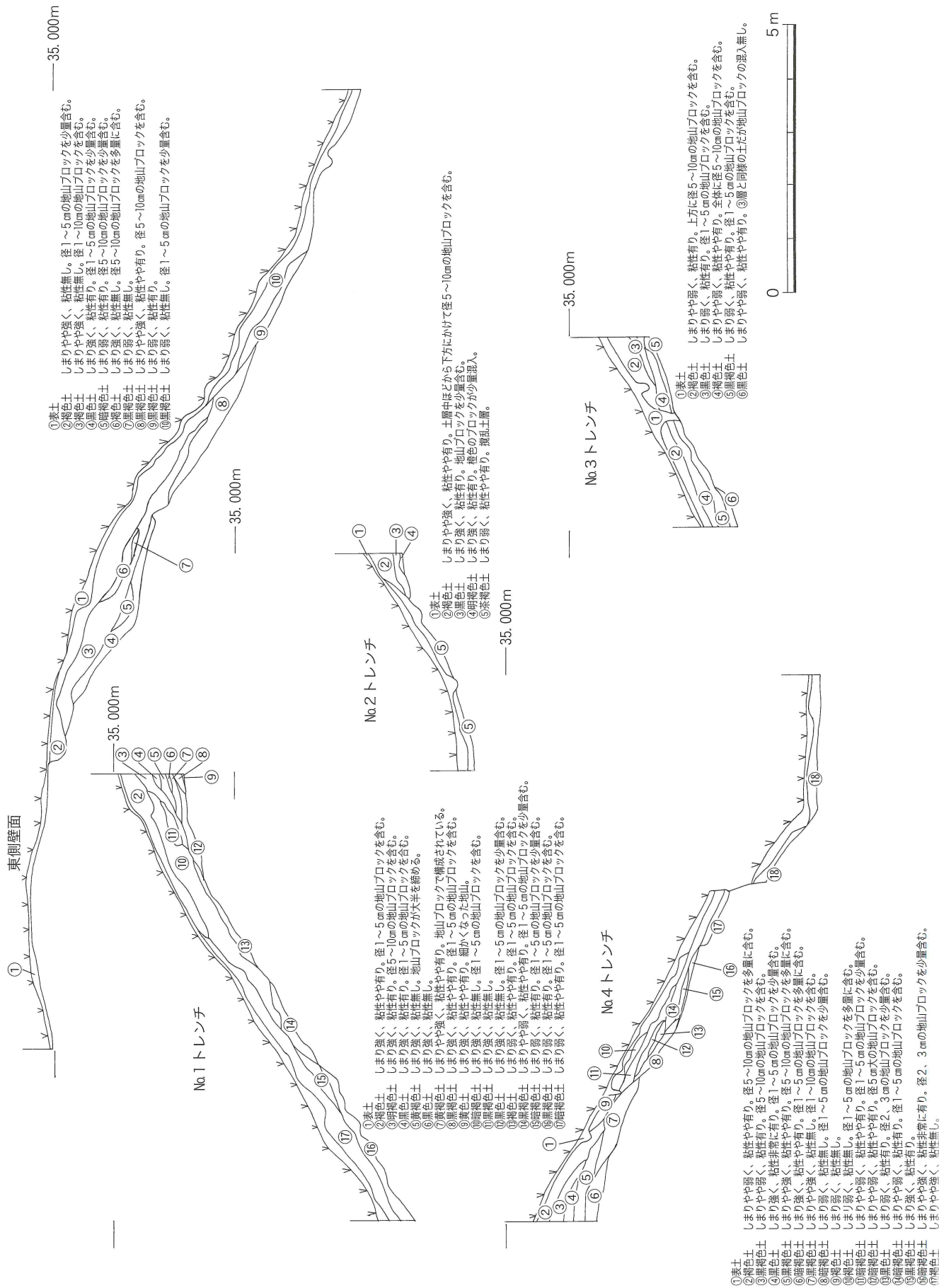
また、墳丘東側は、茶畑の造営により削平されており、墳丘が四角に切り取られている。墳丘を断ち割るようになっているため、削平された崖の面を清查し、土層の確認をした。その結果No.1、2、4トレンチ同様墳丘の裾部が確認できた。

No.4トレンチの南方の平場では古墳の墳丘と思われる遺構は確認できなかった。また、各トレンチからは、遺物の検出は無かった。

それらの結果、墳丘の形態は円墳で、直径約22mを測る。この墳丘は、地山を削り出している部分と盛土をしている部分があり、その状況と第一主体部と第三主体部の位置関係を勘案すると、第三主体部が構築された当初の姿と、その後の第一・第二主体部が造られた形とは変化していることが考えられる。これらは同時期に築造されたものではなく、当初の段階では竪穴式木棺直葬の古墳であったものを、次の段階で新たな礫礫を築き古墳を造営していることが判明した。墳丘は、自然の地形の丘陵があり、それを削ることにより墳形を成形し、その後盛土して形作られたと推測される。



第2図 五塚山古墳 墳丘測量図・トレンチ配置図



第3図 墳丘トレンチ土層断面図

2 第一主体部について（第4～7図）

主軸方位 N-27°-E

床面海拔高度 主体部中央付近で34.6mを測る。

最も大きく中心的な位置を占めている遺構で、隅丸形状で竪穴式に長方形の掘り方を持つ。規模は、長辺の残存長で4.92m、最大幅2.47m、深さは最大で約70cmである。主軸方向に対して北側から南側へ若干の傾斜をとっている。

また、主軸方向に対して南側の壁については、確認調査時のトレンチにより一部破壊しているが、厳密な隅丸方形にはならず、舳先状のやや舟形を呈している。

遺物の出土状況から、主軸方向に対して北方が頭部になるように埋葬されたと考える。

第7図 模式図に示したとおり、竪穴状の掘り方の床面に礫を敷き詰めて棺を安置し、その回りと棺の上面を礫で覆っていた。つまり、棺はすべて礫で覆われた「礫槨」という埋葬形態を持つ古墳であることが明らかとなった。尚、棺の大きさの推定として、長さ約3.3m、幅約1mと思われ、礫の検出状況から箱式の木棺と考える。

遺物 この主体部からは、有蓋台付四連坏・台付三連毬・青銅鏡・鉄製剣・鉄製矛・垂飾付耳環の金具・玉類が出土した。崩落した礫との重なり状況から、土器及び鉄剣・鉄矛・金具・玉類は棺内遺物で、青銅鏡は棺上に置かれた遺物である。

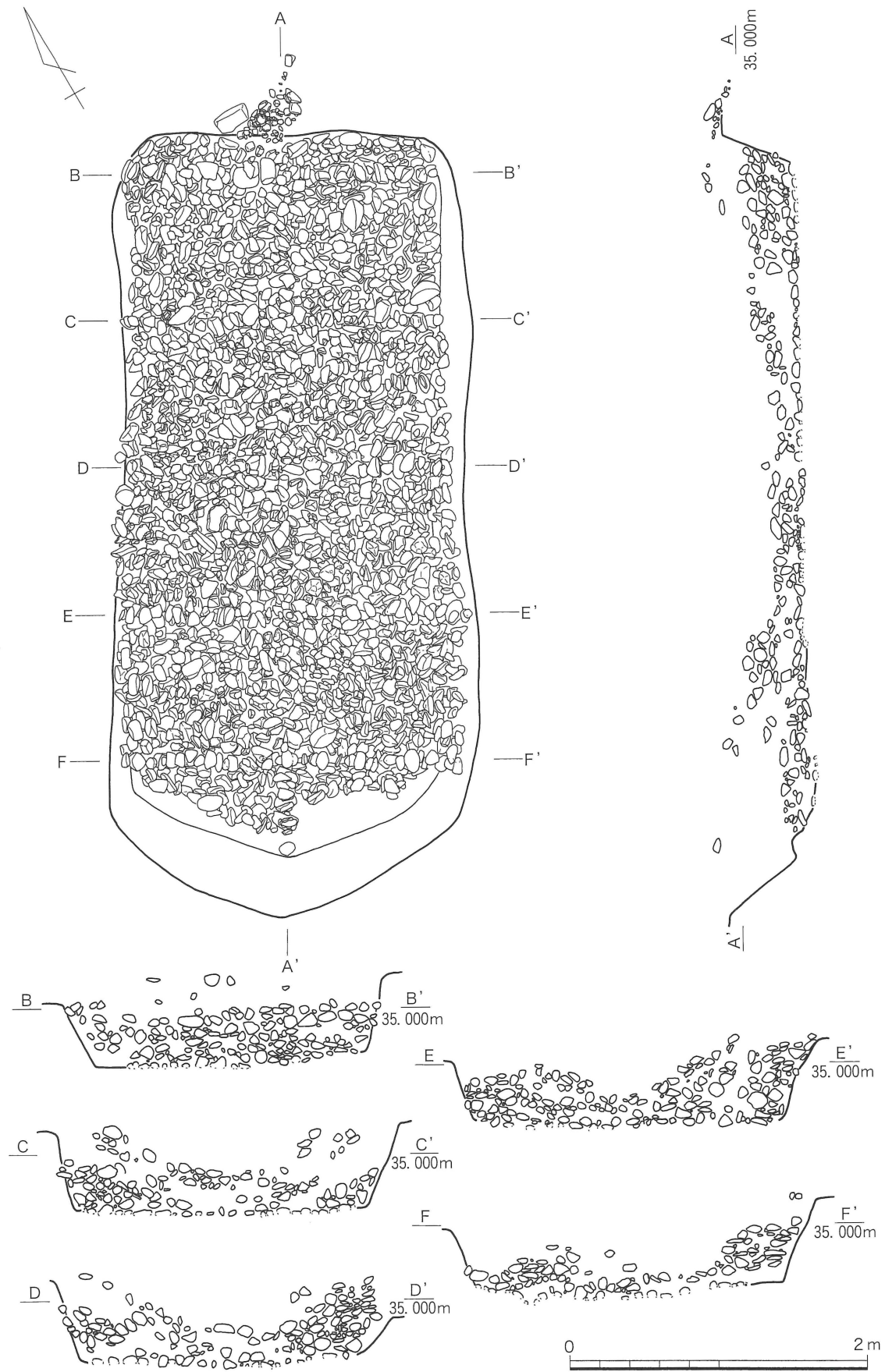
3 第二主体部について（第8・9図）

主軸方位 N-24°-E

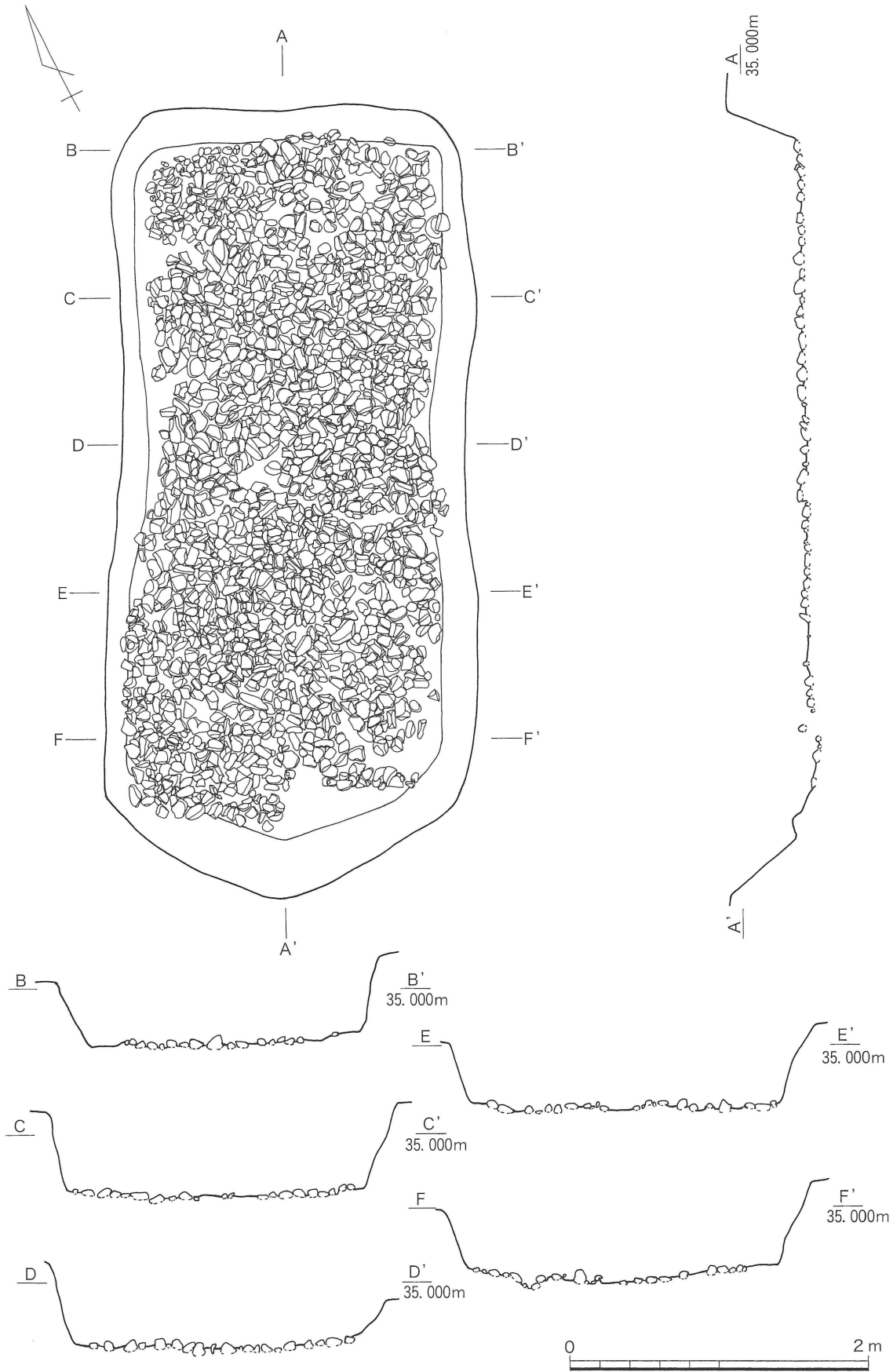
床面海拔高度 主体部中央付近で34.8mを測る。

礫槨（第一主体部）の主軸に平行して、すぐ隣約15cmに寄り添うように小さな竪穴の遺構が検出された。これは、礫槨と違って礫で覆われているということにはなかったが、床面には礫が整然と敷き詰められていた。また、形状も長楕円形で、掘り方の大きさで全長2.62m、最大幅1.23m、深さは最大で約55cmと非常に小さく、人の身長と比較して見ても、大人が埋葬されたとはいえ難いものである。礫槨と同様、主軸方向に対して北側から南側へ若干斜面している。

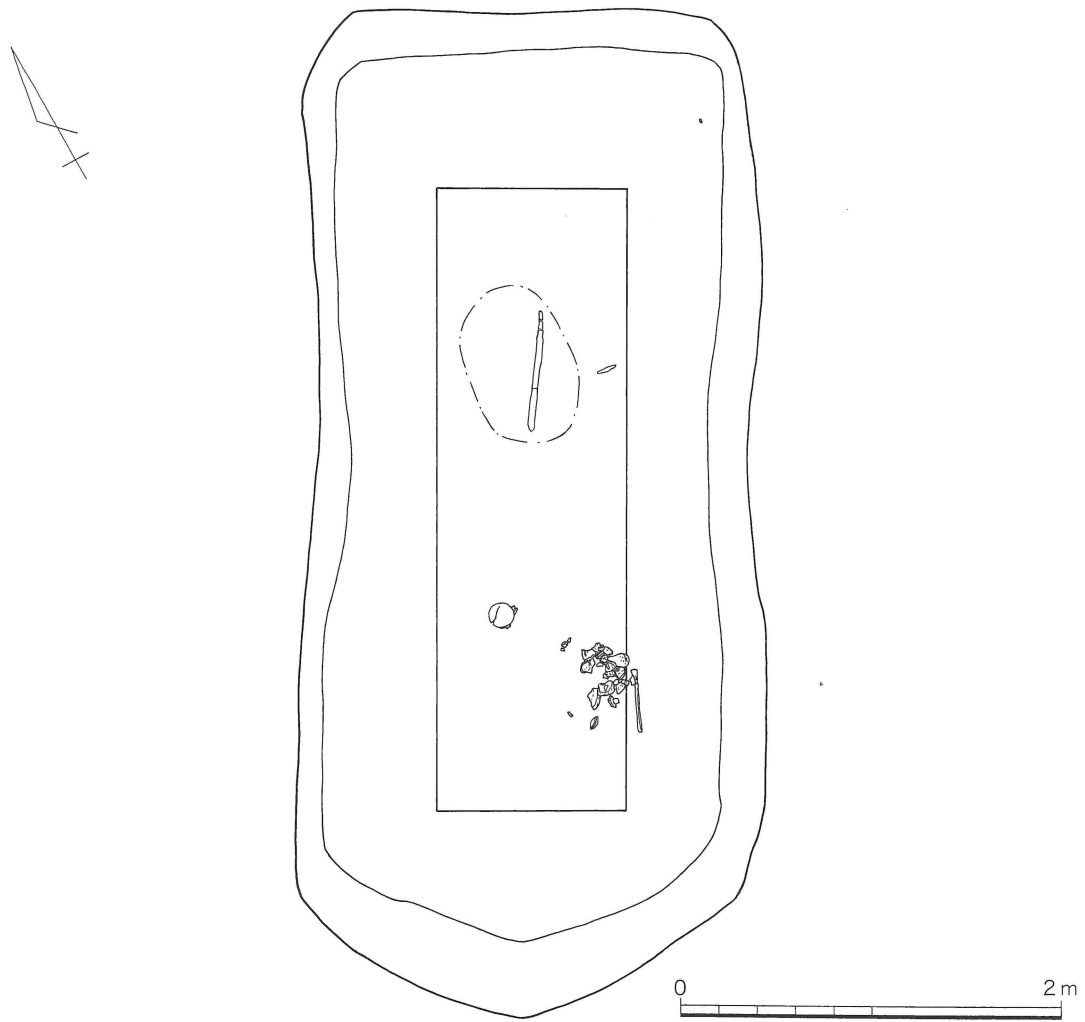
遺物 出土した遺物は直刀1振のみである。これは、長さ約78.8cm、幅2.9cmの鉄製直刀である。



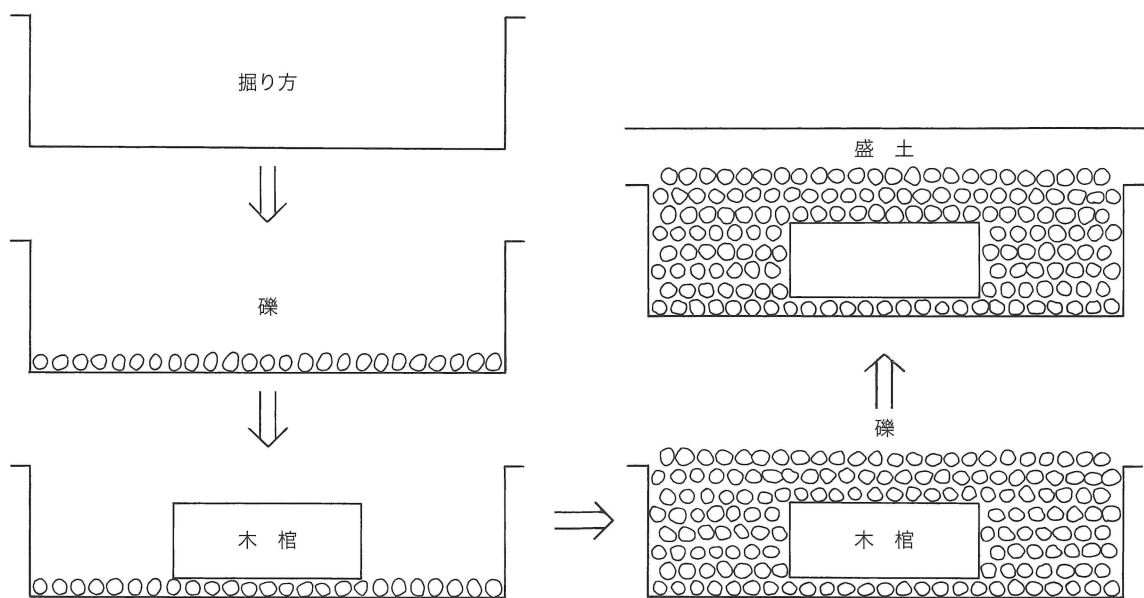
第4図 第一主体部（礫）検出状態図



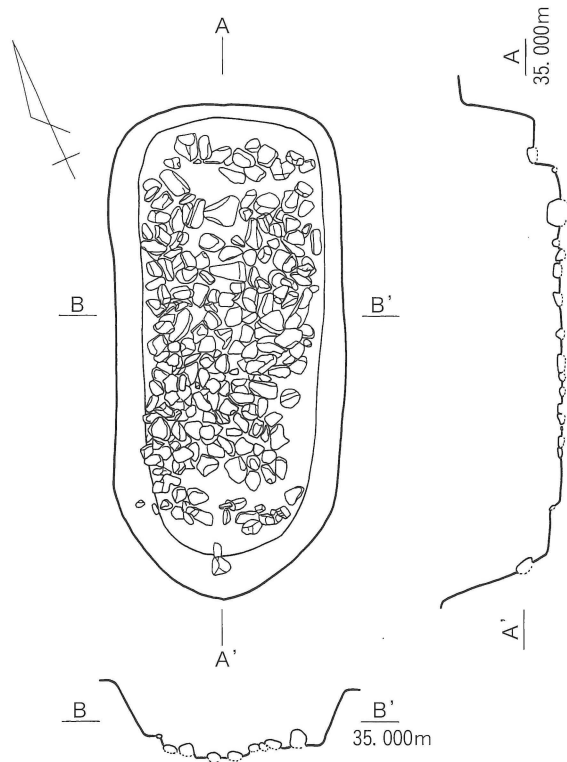
第5図 第一主体部（礫檣）最終状態図



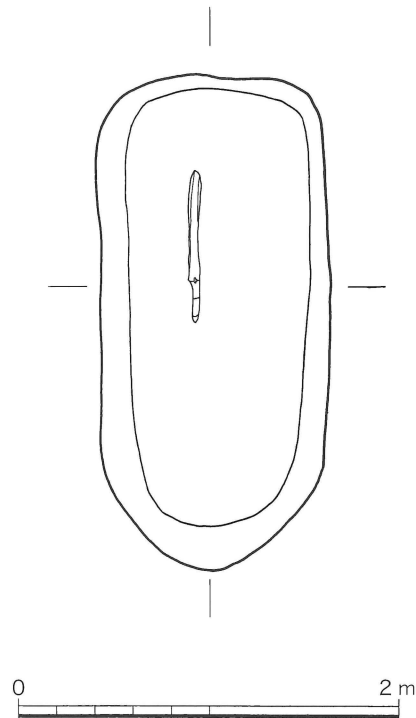
第6図 第一主体部（礫槨）遺物出土状態図



第7図 礫槨 模式図



第8図 第二主体部 遺構図



第9図 第二主体部 遺物出土状態図

4 第三主体部について (第10・11図)

主軸方位 N-87°-E

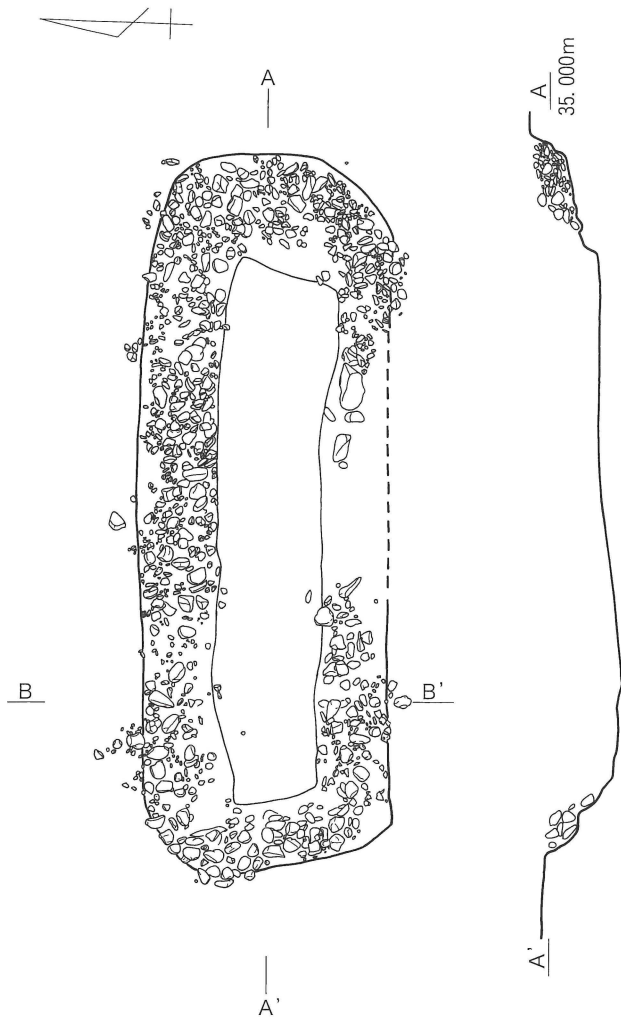
床面海拔高度 主体部中央付近で34.7mを測る。

礫塚の北側隅に主軸方向が違う埋葬施設が検出された。掘り方の規模は全長3.80m、幅1.30m、深さは最大で約47cmである。主軸方向に対して東側から西側へ若干の傾斜をとっている。

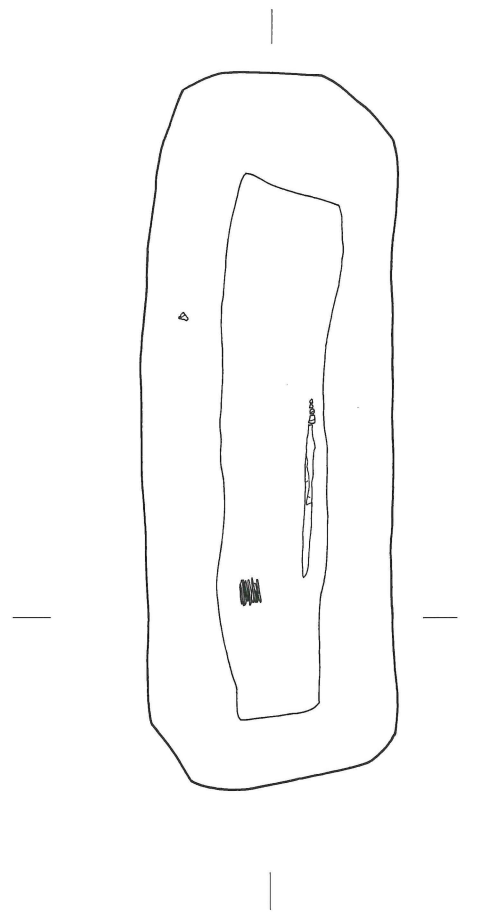
この主体部は長楕円形に掘り込んでいるが、ここでは底面は土のままに棺を置き、棺と掘り方の間には礫を詰めている。さらに、棺の上には土を被せたようである。

また、この第三主体部の長辺の一部が、第一主体部の礫塚と切り合っていることで、その古墳(第三主体部)を壊して礫塚(第一主体部)を構築していることが判明した。つまり、ここには礫塚が構築される以前に、既に古墳が存在していた。

遺物 出土した遺物は鉄製の鍬と鉄製直刀のみである。鉄鍬は37本が塊となって出土した。



第10図 第三主体部 遺構図



第11図 第三主体部 遺物出土状態図

VI. 遺物について

1 出土土器について

○有蓋台付四連坏（第12図 No.1～3）

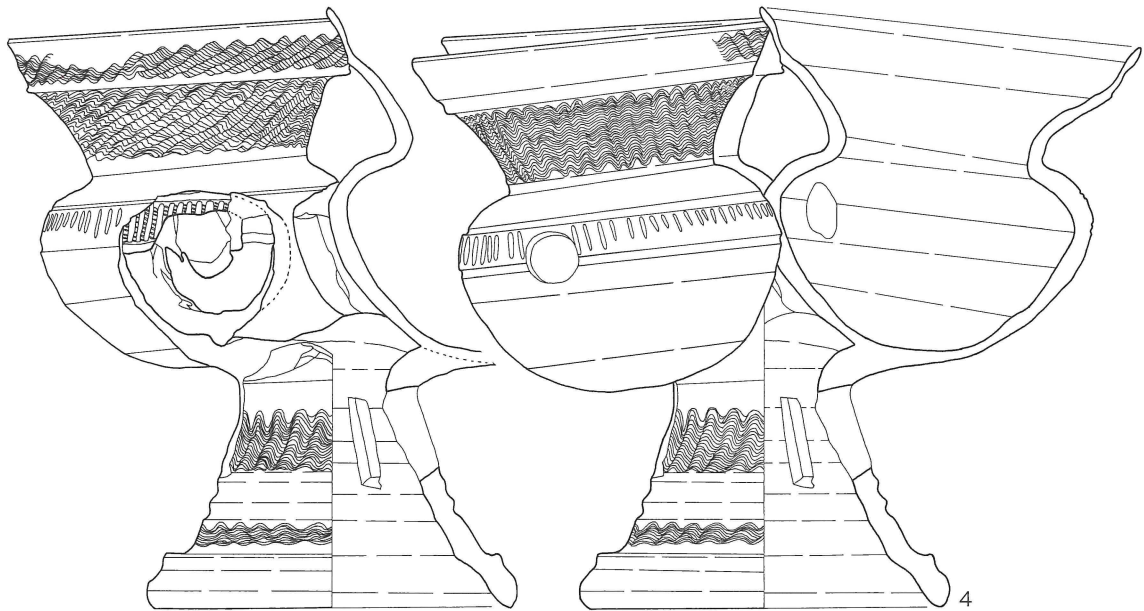
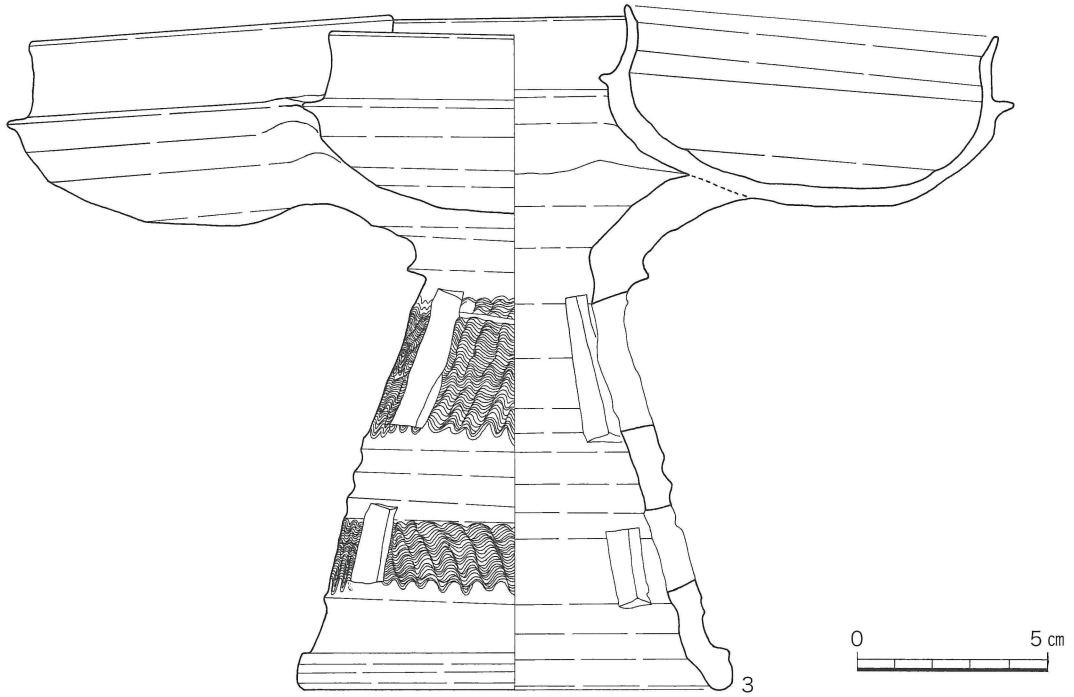
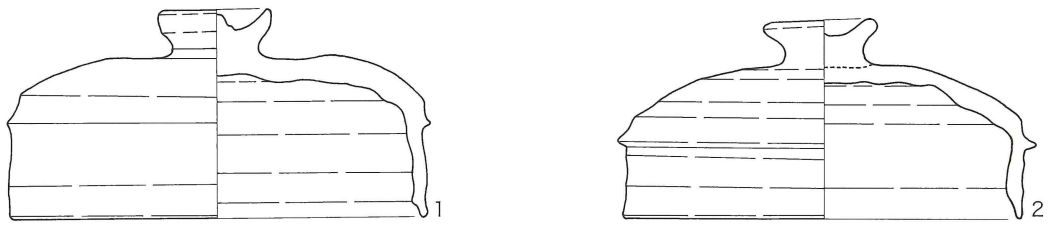
礫槲（第一主体部）の南隅から出土した須恵器で、4つの坏が台の上で一つに連なっており、蓋を伴う。坏は、蓋受を有して口縁部は直立し、全体の形状はやや箱型を呈する。口径は9.2～9.8cmを測り、全体の高さは18.2cmを測る。台部は二段透かし入りで、ラッパ状に開き、櫛状工具による波状文を上下二段に施す。台部の径は11.1cm、接合部までの高さ12.2cmを測る。蓋は2点のみの出土で、いずれも口縁部が垂直に垂下し口縁部と体部の境に稜を持ち、全体の形状は箱型を呈し、つまみを有する。口径は10.4cm～11.0cm、高さ5.3～5.5cmを測る。尚、この2点の蓋は若干異なった形状を呈し、No.1は肩が強く張った形状で、No.2は肩がややなで肩状に緩やかに傾斜している。恐らく、別の製品を代用した可能性がある。

この遺物の出土状況が、礫にまみれてばらばらに砕けた状態で出土しているため、その製作順序が明らかになった。まず、それぞれの坏を正規に作り、これとは別に台部分を作り、その後4つの坏と台を粘土で撫でつけて接続している。従って、貼り付け粘土で見えなくなる部分の坏の底部も丁寧に成形されている。

この須恵器は尾張地方の特徴を有していることから、尾張 東山窯で焼かれた5世紀末の遺物と考えられる。尾張で焼かれ当地方に持ち込まれたものと考えられ、当時の交流を示す貴重な資料である。

○台付三連甗（第12図 No.4）

礫槲（第一主体部）から出土した須恵器である。3つの甗が台の上で一つに繋がった器種である。有蓋台付四連坏と同様に礫にまみれてばらばらに砕けた状態で、しかも有蓋台付四連坏の破片と混在しており、2つの土器は同じ場所に置かれていた。甗は頸部から口縁部はラッパ状に開く。体部には平行な二条の沈線を巡らせて、穿孔を有する。また、胴部には櫛状工具による刺突文が、頸部には櫛状工具による波状文が施されている。口径は9.3～10.0cm、高さは約9.0cm、胴部幅約8.6cm、全体の高さ16.0cmを測る。台部は一段透かし入りでラッパ状に開き、櫛状工具による波状文を上下二段に施す。台部の径は9.3cm、接合部までの高さ約6.5cmを測る。



第12図 礫槲 出土土器 実測図

これも一度に作られたのではなく、それぞれに1つの台と3つの礎を別々に作った後、粘土紐により4つを接合して、礎の体部に新たな穿孔を施している。従って、接合して見えなくなってしまう部分にも、きれいに施文されていた。有蓋台付四連坏と同様に貴重な資料であり、5世紀末に比定される。

2 金属製品について

○青銅鏡（第13図 No.1）

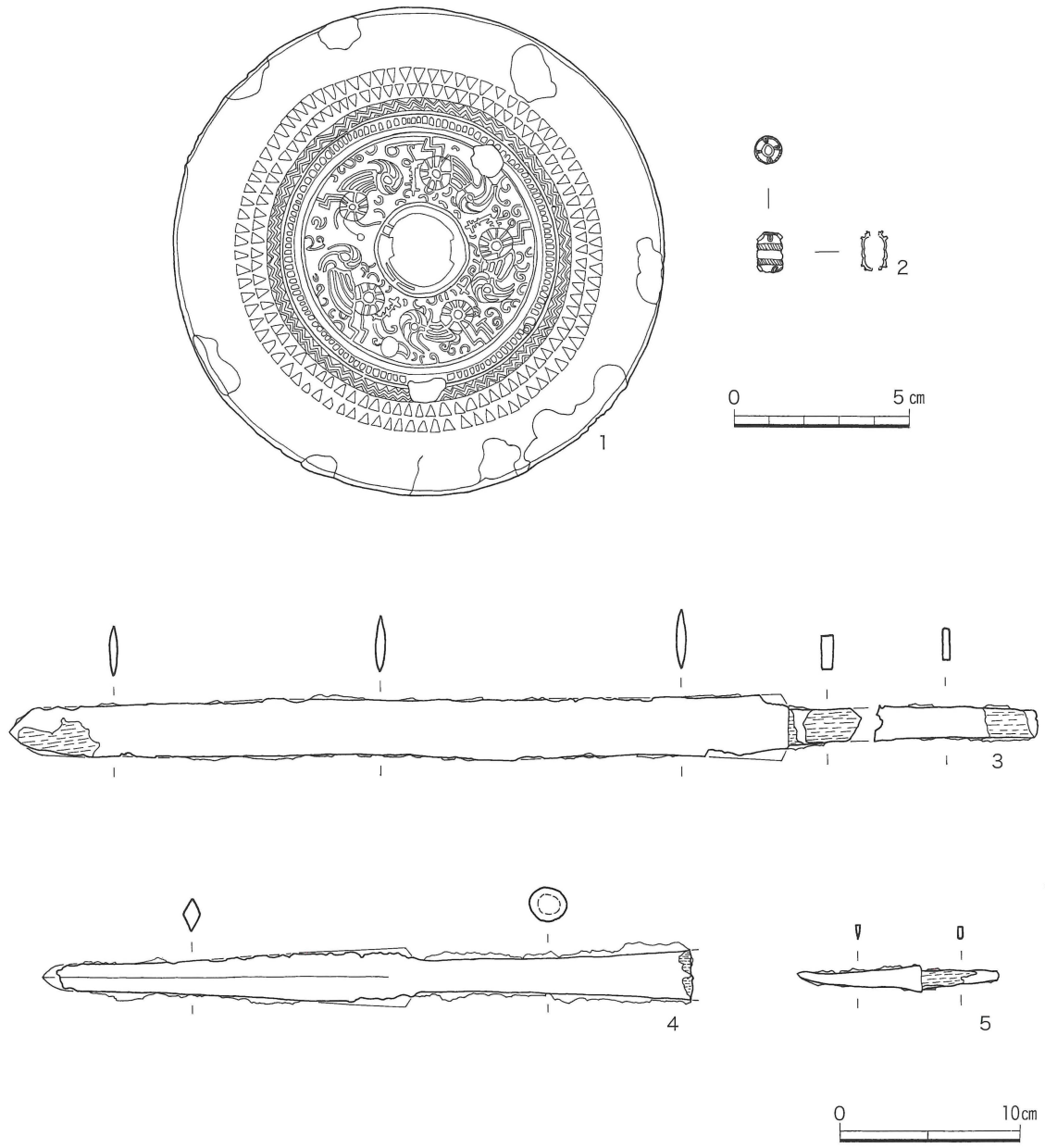
礫櫛（第一主体部）から出土した、青銅鏡である。文様は5つの獣と思われる意匠があることから、獣形鏡と思われる。径は13.8cmである。

外区は縁から1.8cmは文様がなく、幅0.8cmの鋸歯状文帯、0.4cmの波形状文帯に至る。内区は0.4cmの断面三角形の櫛状文帯を経て、獣文のある部分へと到達する。獣文は五体施されている。鈕の直径は1.9cmで、穴が空いている。

○金具（第13図 No.2）

礫櫛（第一主体部）から出土した。金製の金具の一部と思われ、長さ1.1cm、幅8mmで中空である。胴部が節状に3つに区切られており、中心の節以外には斜めに刻み目が施されている。穴の周囲には、金属を曲げ水滴状の形にした飾りが付けられている。完形ではなく製品の一部のためその全容は不明だが、類似的なもので垂飾付耳環ではないかと考える。但し、出土した金具は1点のみで他の部品が全く出土していないこと、さらに、耳環本体の出土もないことから、本来、垂飾付耳環であったものが破損したため廃棄することなく、その一部を首飾りの部品或いは何らかの装飾品として使用したのではないかと推測する。尚、出土位置が玉類出土範囲から離れている。

こうした垂飾付耳環の出土例は福井県天神山7号墳や三重県内にあり、直ちに同類とはいえないが同種のものであると考える。



第13図 礫擲 出土金属製品 実測図

○鉄剣（第13図 No.3）

礫槲（第一主体部）から出土した。両刃でまっすぐに尖った刃部を呈する。また、刃部は茎部近くでわずかに広がっている。長さ57.7cm、幅3.3cm、重ね0.6cm、刃部長44.4cm、茎部があるが、刃部と接合しない。刃部と茎部に木質が残り、茎部に目釘の穴が残る。

○鉄矛（第13図 No.4）

礫槲（第一主体部）から出土した。刃は先端から徐々に広がり、袋状の着柄部直前で終わる。着柄部は、刃部付近では一度細くなるが、再び次第に広がっていく。長さ36.0cm、幅1.9cm、重ね0.9cm、刃部長20.4cm、袋部外径2.0cm、内径1.0cm、先端部欠損、着柄部内側に木質が残る。

○刀子（第13図 No.5）

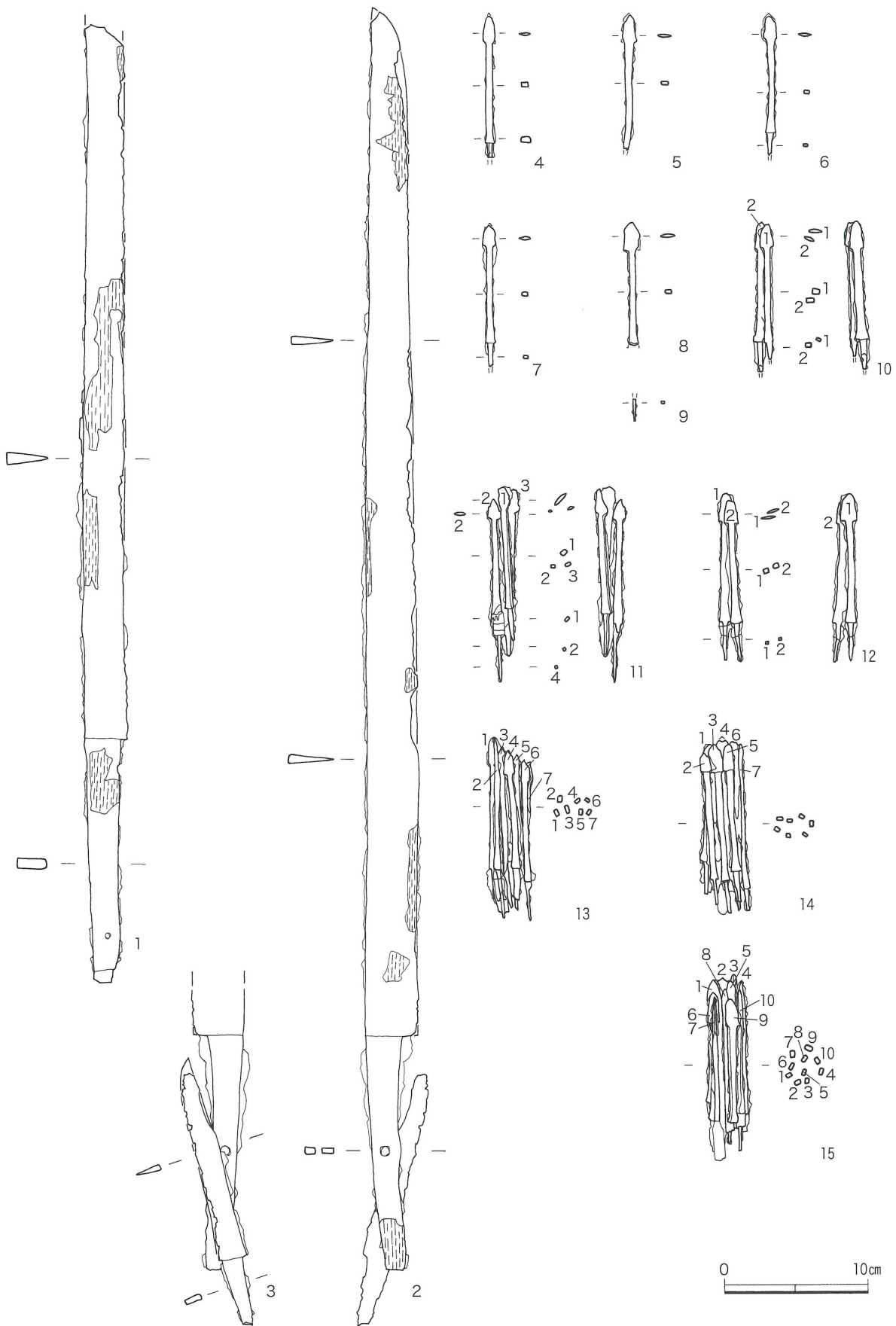
礫槲（第一主体部）から出土した。長さ11.5cm、幅1.5cm、刃部の重ね0.3cm、茎部の重ね0.4cm、刃部長7.1cm、茎部に木質が残る。

○直刀（第14図 No.1）

第二主体部から出土した。これは長さ78.8cm、幅2.9cm、重ね0.4cm、刃部長51.0cmの鉄製直刀である。片刃の直刀で、反りはなく、先端が欠損している。茎部に目釘穴、木質が残る。

○直刀（第14図 No.2）

第三主体部から出土した。これは長さ90.3cm、幅2.9cm、刃部長73.3cmの鉄製直刀である。茎部に目釘穴が残る。



第14図 第二・三主体部 出土金属製品 実測図

○刀子（第14図 No.3）

第三主体部から出土した。長さ19.7cm、幅2.2cm、刃部長13.6cm、重ね0.2cm、第14図 No.2の直刀の茎部と錆により癒着している。

○鉄鏃（第14図 No.4～15）

第三主体部から出土した。すべて長頸鏃で、台形関を有する。刃はすべて2.0cm前後で、全長も10～12cmとほぼ同じ種類の鉄鏃である。一部、茎部周辺に木質が残存しているものがある。形状から5世紀代に比定される。

3 玉類について

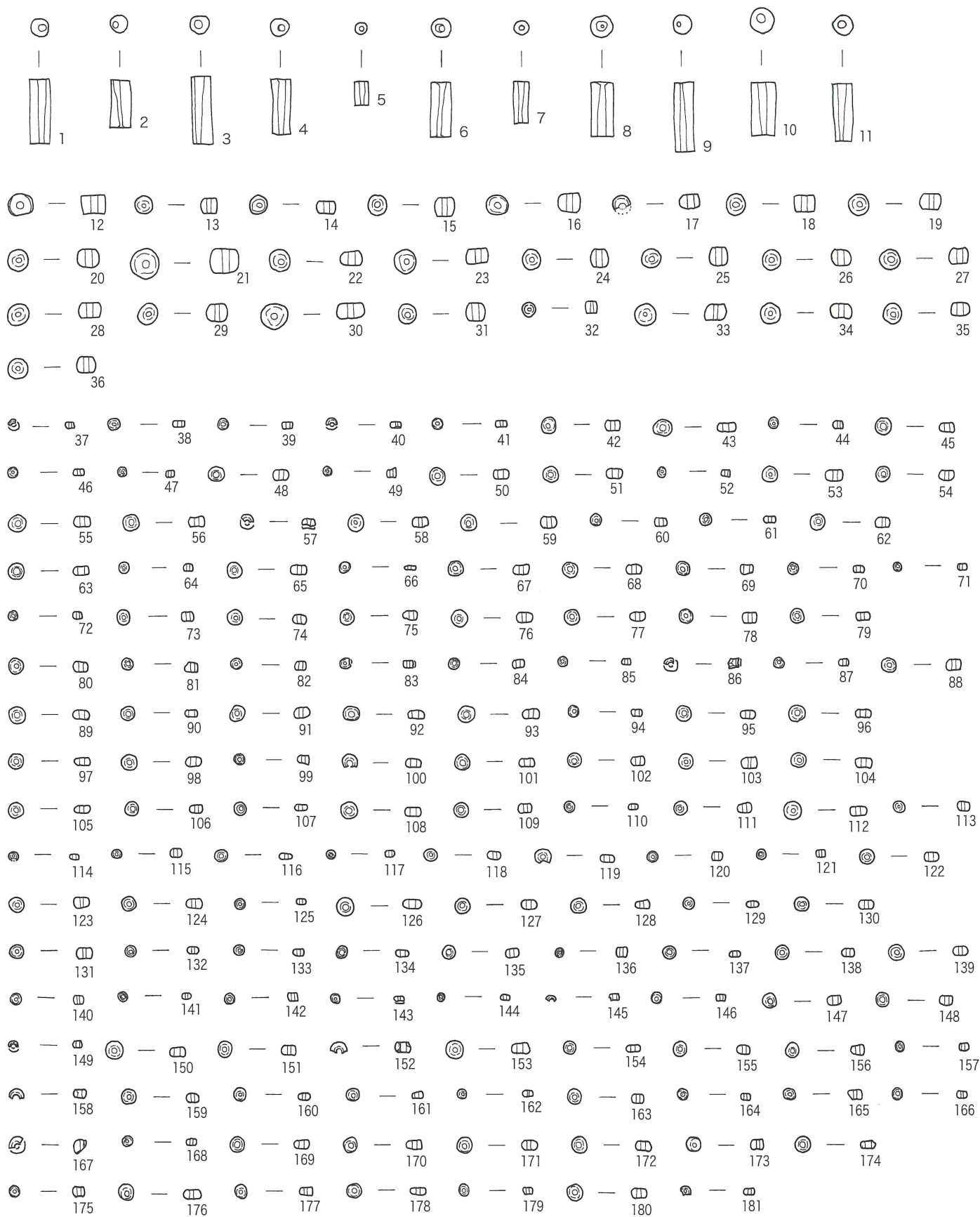
玉類はすべて、礫塚（第一主体部）からの出土である。管玉が11点、丸玉が25点、小玉が145点出土している。（第15図）

管玉は石製で、緑色及び淡緑色を呈し、長さは2.2cm～1.3cm、外径0.7cm～0.4cm、内径0.3cm～0.1cmを測る。（第15図 No.1～11）

丸玉はガラス製で、青色を呈し、長さは0.8cm～0.4cm、内径0.2cm～0.1cm、厚さ0.6cm～0.4cmを測る。（第15図 No.12～36）

小玉もガラス製で、青色のものと緑色のものがある。長さはいずれも約0.3cmで、外径約0.5cm、内径約0.2cmを測る。（第15図 No.37～181）

これら玉類は、礫塚内の中心からやや北側で集中しており、同一地点からの出土のため、埋葬位置の判断材料になると考える。



第15図 磬擲 出土玉類 実測図

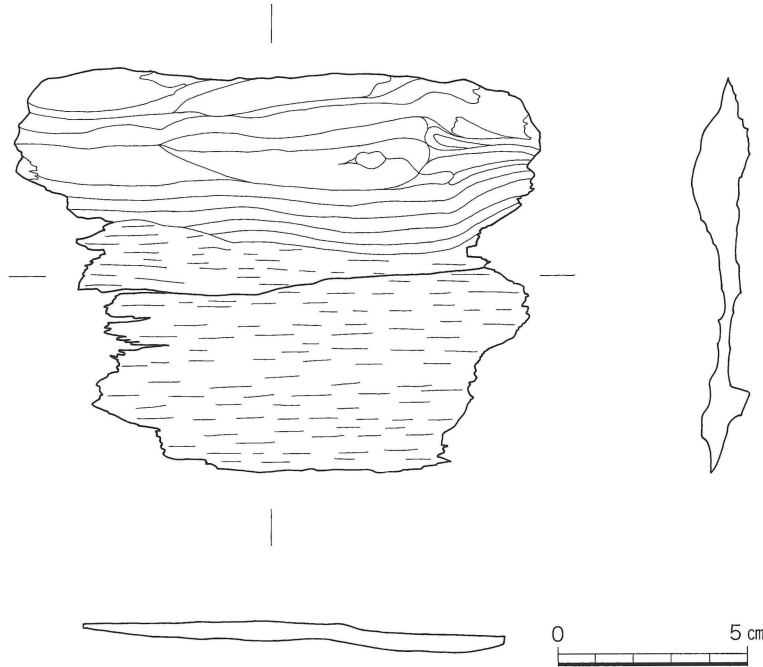
4 木製品について

礫槨（第一主体部）の中央よりやや南で、青銅鏡と重なって出土した。このため、銅の成分を受け腐食せず残存していたと思われる。板状の木材の断片であり、おそらく棺材と思われ、棺は箱型と推測する。残存長で長辺13.7cm、短辺10.5cm、最大厚み1.4cmを測る。

◎コウヤマキ科 コウヤマキ属 コウヤマキ

木口では仮導管を持ち、早材から晩材への移行はやや緩やかで晩材部の幅は極めて狭い。柾目では放射組織の分野壁孔は小型の窓状で1分野に1～2個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。コウヤマキは本州（福島以南）、四国、九州（宮崎まで）に分布する。

（以上、吉田生物研究所の報告による。）



第16図 礫槨 出土木製品 実測図

Ⅶ. まとめ

五塚山古墳は、静岡県内でも類例の少ない「礫槨」という構造の埋葬施設を持ち、県内でも例を見ない特異な須恵器や垂飾付耳環の一部と思われる金具が出土した、極めて貴重な古墳といえる。今回の調査結果、5世紀末の古墳と考えられ、概略をまとめてみたい。

古墳築造当初は地山を削り出した丘陵に埋葬部（第三主体部）を掘り、割り竹型木棺を直葬し、棺の周囲を礫で囲んだ後、土砂で覆い棺を埋葬したと思われる。出土した鉄鏃から5世紀代の古墳であると思われる。

5世紀末になり、この丘陵に古墳が再び築造される。この時点で旧埋葬部を断ち切るように新たな掘り方を施し、礫槨を構築するのである。前の墳丘を整地し、北西部分には盛土を施して、新たな墳丘を形作るのである。その被葬者は尾張地方との交流を持ち、近隣には無い物品を所持する地域の有力な支配者層であると思われる。

先にも述べたが、当地域は菊川を中心に横穴群が多く分布する地域である。しかし、この横穴群の分布状況は、下小笠川を境に一変する。横穴群が濃密に分布する地域は下小笠川の左岸までに限定され、右岸側においてはわずかに1群3基のみである。また、大東町域を離れ少し広い視野で見ると、下小笠川より西側では、この横穴群以外に大須賀町に2群10基が存在するのみである。

こうした状況の中、高塚式の古墳の分布状況を見ると、首長墓的な古墳は町内には今までに確認されておらず、小笠町の上平川大塚古墳や舟久保古墳などの前方後円墳が確認されているのみである。

大東町内の高塚式の古墳は、「五塚山古墳」を含めて17基確認されており、その内、6世紀代と思われる古墳時代後期の古墳については15基あり、横穴群の地域と重複して分布している古墳が6基で、それ以外の9基はすべて下小笠川より西側に存在する。こうした分布状況において五塚山古墳が存在する。

この古墳が立地する地点は、大東町域で見るとほぼ中央にあたり、墳丘の東側直下には下小笠川が流れている。この川の現在の流路については、古墳時代まで遡ることは出来ないが、五塚山古墳が当時も下小笠川右岸に立地していることは確実である。

このようにして見ていくと、5世紀末の五塚山古墳が周辺地域の支配者層の古墳として築造され、6世紀後半に至ると横穴の築造が始まるが、この地域はその西限となっていくのである。

但し、出土土器の製造年代と供給もしくは使用年代を考慮した場合、5世紀末の遺物の出土により直ちに当古墳が5世紀末に築造されたものと判断するには危険が生じる。この遺物が遠方の地域で製作されたものであり、その移動時間はどれ程あり、また、焼成後すぐに埋葬されたかは不明である。さらに、その主体部と切り合っている第三主体部出土の鉄鏃は、5世紀代に比定されるが、同様である。浅学の担当者では究明できず、関係各位のご教示を願いたい。

しかし、県内にも首長墓と呼ばれる巨大な古墳や、副葬品に特徴ある古墳が数多く確認され、国や県の指定を受けている古墳がある。こうした古墳の中において、五塚山古墳は決して巨大な前方後円墳ではないが、大東町域のここに存在する意味は大きいものであると確信する。

今後は、今回の調査により明らかとなった資料をもとに、この古墳の意義を十分認識し、その取り扱いについて議論し、この古墳が町民の生涯学習の場として大いに活用される事を希望します。

《参考文献》

- 『東名高速道路（静岡県内工事）関係埋蔵文化財発掘調査報告書』
1968 日本道路公団・静岡県教育委員会
- 『焼津市誌』（下巻） 1971 焼津市
- 『城山古墳発掘調査（第三次調査）概報』 1981 島田市教育委員会
- 『遠江の横穴群』 1983 静岡県教育委員会
- 『日本出土の垂飾付耳飾について』 野上丈助 『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』
1983 大阪、藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会
- 『島田風土記』（大津編） 1984 島田市教育委員会
- 『静岡県考古学会シンポジウム 静岡県における4～5世紀の墳墓について』
1987 静岡県考古学会
- 『静岡県史』（資料編2）考古二 1990 静岡県
- 『白岩寺古墳群』 1991 島田市教育委員会
- 『岩滑 清水ヶ谷横穴群 松ヶ谷横穴』 1988 大東町教育委員会
- 『鳥見ヶ谷横穴群』 1990 大東町教育委員会
- 『玉体横穴群』 1991 大東町教育委員会
- 『下土方青谷横穴群』 1993 大東町教育委員会
- 『明僧横穴群』 1995 大東町教育委員会

写 真 图 版



1



2



3



1



2



3



4



1



2



3



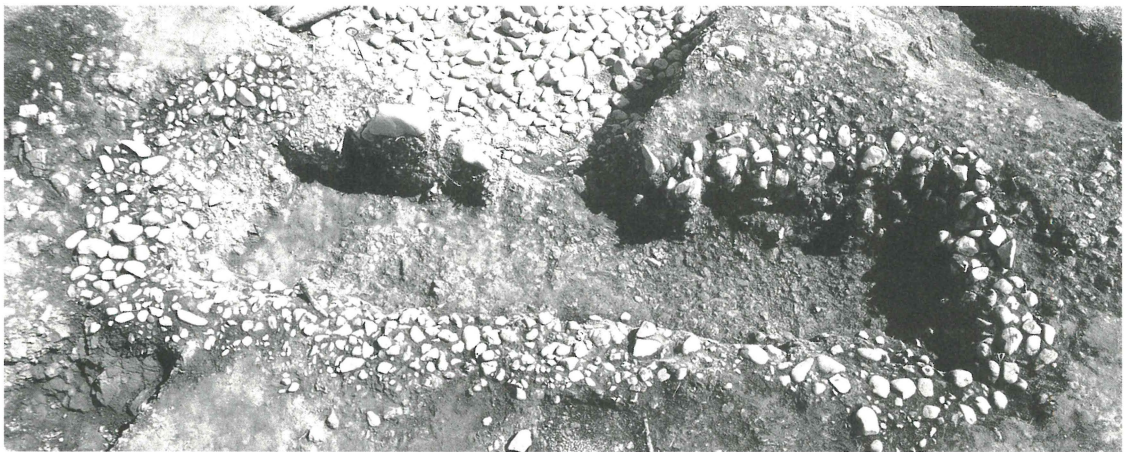
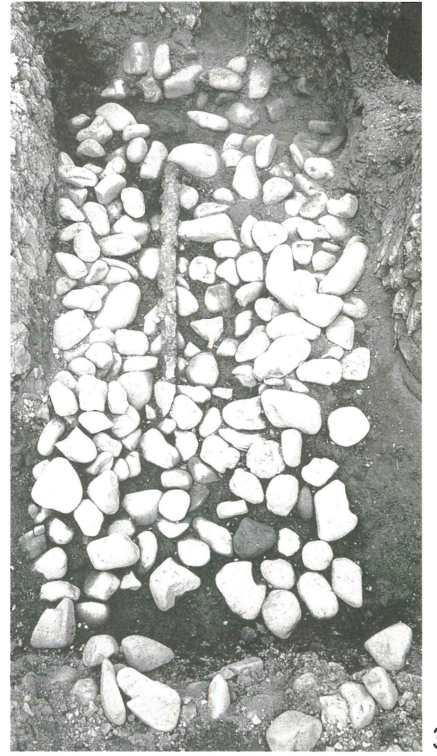
4



5



6





1



2



3



6



4



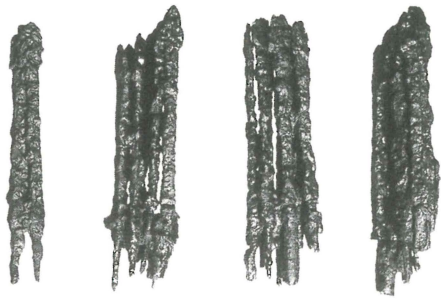
5



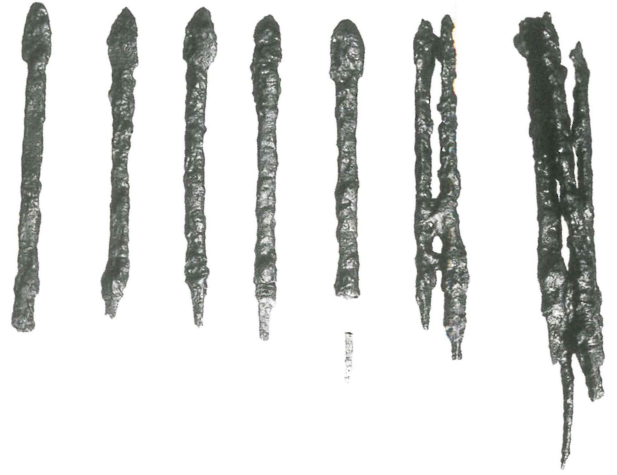
7



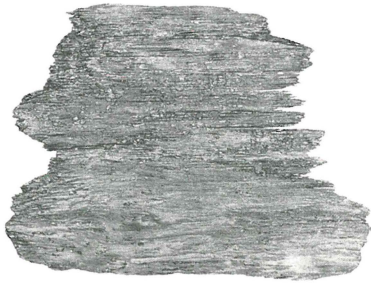
8



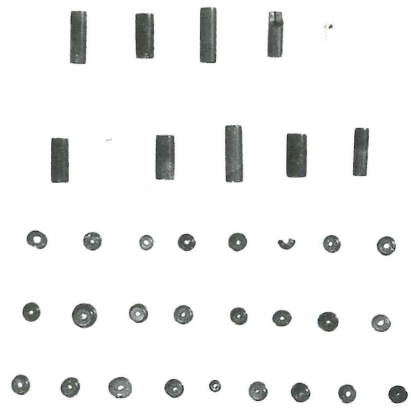
1



2



3



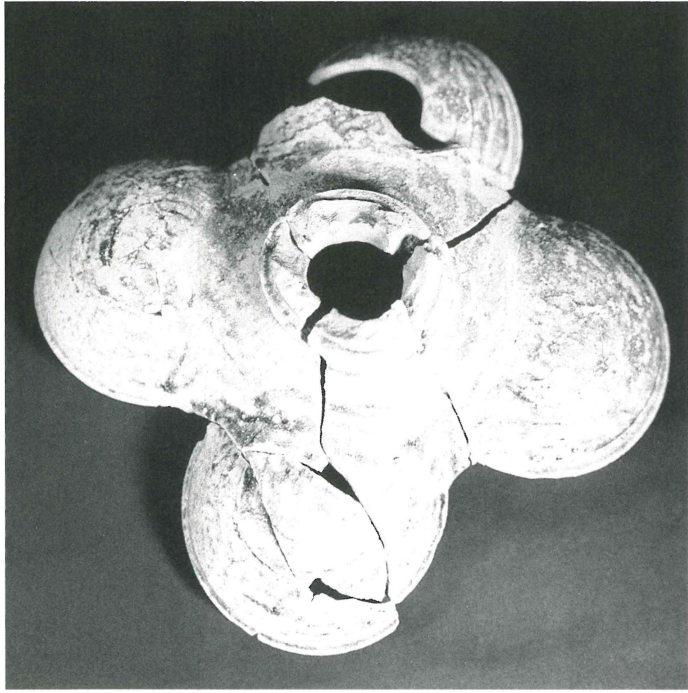
4



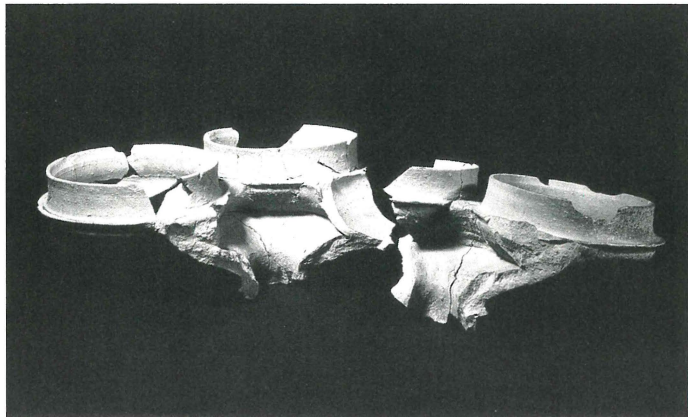
5



1



3



5



2



4



6

報告書抄録

ふりがな	いつづかやまこふん							
書名	五塚山古墳 発掘調査報告書							
副書名								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	鬼澤勝人 夏目不比等							
編集機関	大東町教育委員会							
所在地	〒437-1491 静岡県小笠郡大東町三俣620番地							
発行年月日	平成13(2001)年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。'。"	東経 。'。"	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いつづかやまこふん 五塚山古墳	しずおかけん おがさぐん 静岡県小笠郡 だいとうちょうおおさか 大東町大坂	22447		34° 40' 50"	138° 3' 18"	H9.1.16 ～3.31 H9.8.4 ～10.24 H10.5.26 ～8.10	約100㎡	展望台建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
五塚山古墳	古墳	古墳	礫郭	有蓋台付四連坏 台付三連壘 青銅鏡 鉄剣 鉄矛				

五塚山古墳発掘調査報告書

平成13年3月30日発行

編集：発行 静岡県小笠郡大東町教育委員会
〒437-1491 静岡県小笠郡大東町三俣620番地
電話：0537-72-1121

印刷 松本印刷(株)
〒421-0303 静岡県榛原郡吉田町片岡2210番地
電話：0548-32-0851

